

# 最近六大都市の市電運輸事故に就て

大 西 謙 二

總ての輸送力を擧げて戦力増強へとの國家要請に應じ、全國有鐵道並に私設鐵軌道の陸上輸送力を、決戦資材輸送、重要軍需工場通勤者輸送へと全力を傾注しつつある時、専ら都市内の交通を目的として發展して來たところの東京、横濱、名古屋、京都、大阪、神戸の六大都市の市電も、今や急激にその目的、使命を變じつつあるのを見る。即ち支那事變を契機として異常なる發達を遂げたところの諸重工業は、勞力と資材を比較的容易に入手し得るゝ大都市の近郊周邊部に集中發展した。然るに工場の建設が工員住宅の建設と併行せぬ爲、都市人口の増大に益々拍車をかける結果となつて現れて來たのである。このことは延いて各都市々電の利用の増大となり、從來の地域、人口を對象とし、其の都市内交通機關として發達した市電にとつては非常な負擔増加となつたのである。然るに之に對應する爲の諸設備の擴大、改良を爲すことの非常に困難なる現狀に於ては、現在程度の施設を以て能ふ限

りの輸送力を發揮するより致し方ないのである。こゝに於て市電は、市内沿線並に近郊重工業地帯への通勤者輸送を第一目的として、諸種の乗客調整の手段方法を講じ、従前の單なる市民の市内交通を目的とする性格を脱却し、専ら此の新しい使命に邁進することとなつたのである。

斯くの如く全く新しい重要使命の爲に全力を傾倒しつつある市電にあつても、勞力、資材の不足は掩ふべくもなく、之が克服に對して日夜奮闘せられつつある各市當局者に對しては全く感激の外ないのである。而して補修資材等の不足は、故障車の入庫時間の延長となり、延いて一日一車當走行料の増大となり、益々車輛の損耗を甚しくする。又勞力の不足即ち従業員の不足は勞働の過重となつて、身心の疲勞困憊を招來する。此等の事象が原因となり、相乘して、乗務員の心を異常に前ら立たせることとなり、或は疲勞の餘り注意力が緩漫となり、操作の不活潑を來し、終には

不測の事故を惹起せしめることとなるのである。

近時難否激甚を極むる大都市道路交通の中に於て、不完全なる車輛、勞働過重の爲心身疲勞の乗務員に運轉されることによつて生ずる運輸事故は決して尠くないと思はれる。殊に最近大都市に於ては所謂悪性事故が非常に増加の傾向にあることは、寔に驚心に耐へない。事故撲滅対策確立に關し、各當事者間に於て種々腐心せられつゝある時に當り、以下本年一月乃至六月間の六大都市運輸事故に就て、その趨勢並に諸様相を檢討し、参考の一助としたいと思ふ。

六大都市々電運輸事故月別表

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
都市名							
東京	三二五	二六七	二九一	三二七	三〇〇	三〇八	一、八八
横濱	三	三三	二四	二四	一九	二二	一二三
名古屋	七	六	六	七	七	五	三九
京都	三	三	四	四	三	三	二〇
大阪	二	一〇	二四	一〇〇	一〇五	六六	二〇八
神戸	八	六	七	七	八	八	四六
計	三三三	三三六	三三三	三三〇	三三三	三三〇	二、〇〇二

各市電當局的事故の輕重の觀念、取扱方の相異によつて、多少の取捨があつて、全部を盡して居ないとも見られるが、右表によれば、大體人口稠密の程度、重工業の發達の程度によつて多少が

あるやうに見受けられる。

次に此が事故を惹起せしめた原因により分類して見る。

○乗務員の過失に因る月別事故件數

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
都市名							
東京	元	元	五	五	四	元	二〇
横濱	二	六	五	七	六	五	二五
名古屋	二	〇	三	三	三	三	一四
京都	三	五	二	一	九	二	二二
大阪	元	一六	〇	四	三	七	二七
神戸	三	一	五	三	四	〇	一六
計	二二	二二	二五	二二	二四	二四	一四一

道路通行者の過失に因る月別事故件數

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
都市名							
東京	天	六	五	六	六	七	三七
横濱	二	四	一七	一四	三	八	五八
名古屋	七	〇	三	二	三	元	一八
京都	三	三	七	三	五	六	二七
大阪	三	三	三	四	三	元	一六
神戸	元	七	四	四	五	元	二〇
計	二五	三三	三九	三三	三二	二九	一八一

乗客の過失に因る月別事故件數

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
市都名							
東京	二四	一六	一四	一四	一三	五	八九
横濱	一	一	〇	二	一	二	七
名古屋	二	二	一八	九	八	一〇	六七
京都	一四	一六	一六	三	二八	三元	一〇五
大阪	一九	三三	四〇	一四	二〇	三三	一五九
神戸	二	四	六	四	四	一八	四七
計	六〇	八四	九四	五五	六四	七七	四七四

右によれば乗務員の過失に因るものは總件數の二一%にして決して、少くないのを見るのであるが、乗車未済、降車未済の乗客あるに拘はらず、發車し事故を起したるのが非常に多い。此が因つて來る原因が大部分前述の諸相を反映して居るのではあるまいか。

道路通行者の過失に因るものは、依然として自動車事故が最も多數を占めて居る。貨物自動車との衝突事故に於て注目すべき點は、貨物自動車は最近その大部分が薪炭其の他代用燃料によることとなつた爲、その發生瓦斯不足の場合、不意に軌道上に停止する場合が多く、そのまゝ進行するとの見とほしによつて進行して來た電車が、至近距離に至つて停止せんとするも、そのまゝ惰性によつて追突することである。之は双方に於て相當に注意措置す

れば當然避け得られることであると思ふ。近時所謂交通道德の類廢甚しいものがあるが、自動車に限らず、大部分が交通道德に反する所爲によるものである。戦時下なればこそより一層規律ある交通が嚴守せらるべきである。

乗客の過失によるものの大部分が、我先にと、先を争ふ無理な乗車、降車に起因するもの、飛乗り、飛降りが相變らず多い。そして此は最近大都市の急激な乗車人員の増大と、之に随伴せざる運轉車輛數等が原因して居ると思はれるが、要はボンヤリして居ては乗れないとして、無理をするところに起因するものと思ふ。

寔に支那事變以後に於ける六大都市々電の乗車人員の増加は、著しいものがあり、一月一月と増加の一途を辿つて居る。此は恐らく政府に於て何らかの措置の講ぜられざる限り、底止するところはないであらう。(左表参照)

六大都市々電乗客増加調

年度	東京	横濱	名古屋	京都	大阪	神戸
昭和	乗客 對前年一日一軒當 指數增加率 乘車 人員	乗客 對前年一日一軒當 指數增加率 乘車 人員	乗客 對前年一日一軒當 指數增加率 乘車 人員	乗客 對前年一日一軒當 指數增加率 乘車 人員	乗客 對前年一日一軒當 指數增加率 乘車 人員	乗客 對前年一日一軒當 指數增加率 乘車 人員
二年	100	100	100	100	100	100
三年	102	101	101	101	101	101
四年	105	102	102	102	102	102
五年	108	103	103	103	103	103
六年	112	104	104	104	104	104
七年	115	105	105	105	105	105
八年	118	106	106	106	106	106

但し昭和十八年は一月―六月間のものにより推定算出す

次に事故に因る死傷者を各都市別に見てみやう。

○運輸事故ノ死傷者數

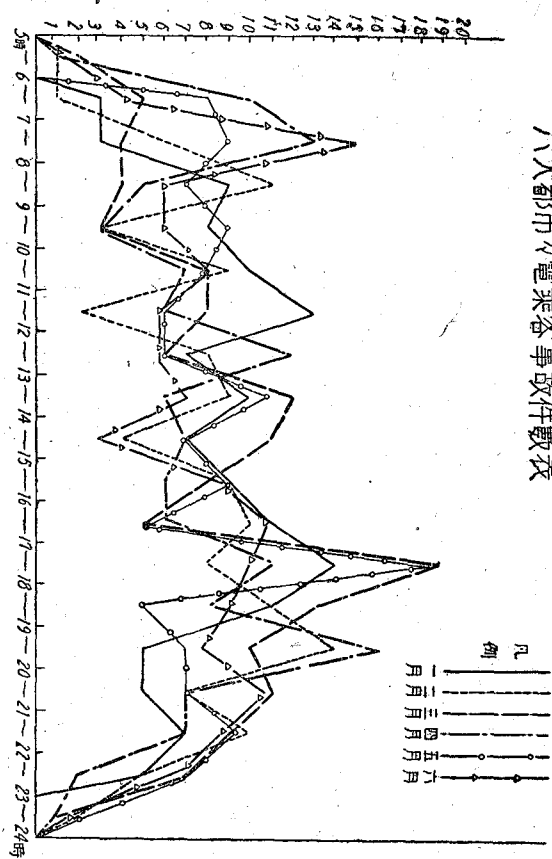
事項	都市	東京	横濱	名古屋	京都	大阪
道路通行者の過失に因る	死	三	二	一	一	一
乗客の過失に因る	死	一	一	一	一	一
乗務員の過失に因る	死	一	一	一	一	一
その他	死	一	一	一	一	一
傷	傷	一	一	一	一	一
傷	傷	一	一	一	一	一
傷	傷	一	一	一	一	一
傷	傷	一	一	一	一	一

神戸	二	三	四	五	六
計	二	三	四	五	六

戦時下貴重なる人命が實に一一四名の多數も失はれて居る。なとへ自らの不注意に基くものとは雖、一人の遊休を許さざる現職局下にあつて、むざくとあたり生命を失ふことの如何に國家的損失が大きいか。況してや運輸事故によつて、殊に乗務員の一瞬の氣の弛みに因つて、之等の事故を招來せしめたとせば、其の責たるやまことに重大と言はねばならぬ。假令死に到らずとも負傷に因つて、一生の不具者を生じ、又は入院加療、靜養等によつて

生産部門への影響は、直に職場へ反映するのである。  
次に乗客事故、道路通行者との事故を時刻別に掲げる。

六大都市々電乗客事故件数表

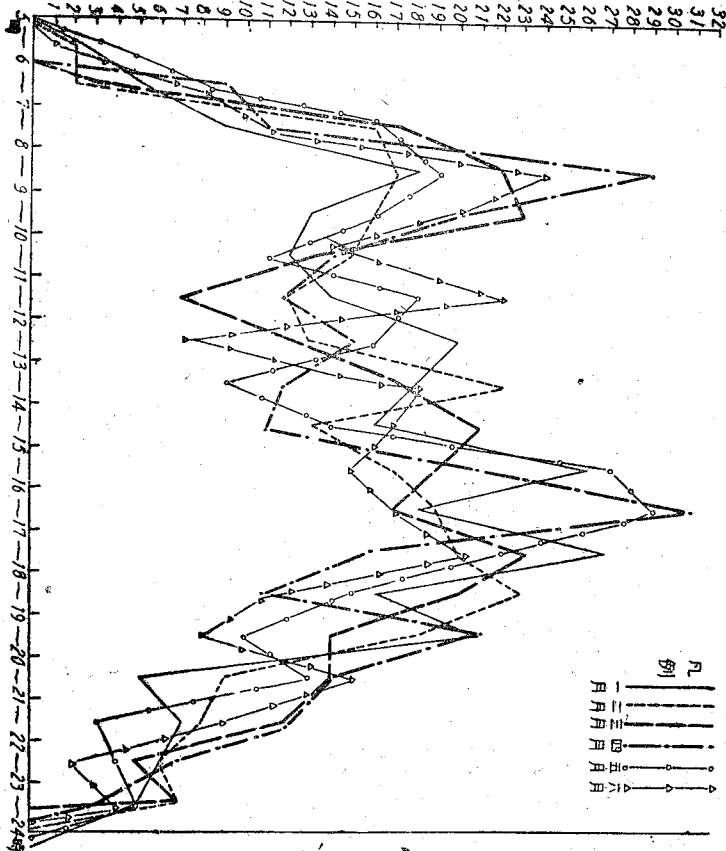


特異の現象と見られるのは、比較的閑散時であるべき午前十時以降午後三時に至る間に於て、反つて事故が減少して居らぬことである。此は恐らく、平素あまり外出せず、市電を利用する機會の少かつた人々が、最近の特殊事情によつて外出利用する機會が多くなり、隨つて不慣れより招來した事故が多いのではないかと思はれる。特に婦人客に多數を見ることがよりしても、容易に推定し得るところである。

乗客事故に付て見れば、依然朝夕の通勤者の輻輳時刻に最も多い。殊に午後の勤務、勞働を終つて、疲勞した心身で歸途を急ぐ時刻が、宛も乗務員の疲勞を覺ゆる時に一致する爲、どうしても最も事故を起しやすいことは各月共通と見られる。然るにこゝに

くなる爲、此の消費時間を取戻す爲、區間運轉速度を増大することに因つて、避け得らるべき事故をも、避け得られざるものとなして居ること及び無停車停留場を停車停留場と誤認することによつて發生するものが多いのではあるまいか。

六大都市々電、道路通行者、ノ、事故件数表



凡例  
 一月  
 二月  
 三月  
 四月  
 五月  
 六月

次に車輛線路の不整による事故を掲げる

車輛、線路に關する事故

都市名	件数	損害	内訳
東京都	1,012	3,333	人 2,000 其他 1,333
横濱市	310	0	0
名古屋市	310	7	8
京都市	310	10	1,333
大阪市	210	4	0
神戸市	210	13	3
計	2,152	2,667	6,333

車輛、線路等の事故は東京都を除き皆相當省略されて居ること故、件数の甚しき相違がある。東京都に於ては著しき資材難が最も端的に表はれて居る。他市に於ても補修不完全或は代替資材の不適合等に因るものが相當ある。唯最も遺憾であつたのは、近畿某市の、制御器よりの發火の爲、僅か一ヶ月間に十數回の同一事故を繰返し、相當多數の負傷者を出したことである。此は直に事故の原因を調査し、何等かの対策を講ずることによつて避け得らるべきであつた。單に機械の故障とのみ言ふべきでなく、車輛技

術關係者の一層の研究を望むものである。

以上通覽しての最も顯著なる事故の要因は

- 一、交通道德の頹廢
- 二、焦 燥 心
- 三、自 己 主 義

以上三點に盡きると思ふ。他に直接的な諸因もあるだらうが、結果は以上の何れかより出で、居ると思ふ。時局下國民は、一層緊張を要し、舊轂を脱すべきであるに不拘、未だ此等の事情の爲事故の頻發すると謂ふことは、眞に國家的大損失であり、直に改善せられねばならぬことである。己れのみ善ければ、他は如何でもよい。我こそ樂をしよう、飽衣飽食しよう、儲けよう。此の心ある爲に、不要に焦燥し、他を押しつけやうとする。こんな反時局的思想が瀾漫して居るやうに見られる。延いて遵法精神が薄くなり、交通道德を輕んずるやうになるのではあるまいか。此等の思想、行爲は直に一掃せらるべきであるが、仲々實現は難しい。茲に於て、各市電に於て先づ垂範、單に電車を走らせればよいとせず、己の一舉手、一投足が直に凄愴苦烈なる戰場へ通するのであることを自覺し、乗客の取扱、運轉操縱等總て親切を以て職責を完遂することによつて、非常に良い結果が現はれるのではあるまいか。日々幾百萬、幾千萬の大家に接する交通關係者の親切なる行爲によつて明朗なる氣風を醸成することが、どんなに社會一

般に大きな反響を與へるであらうか。之は單に運輸事故を減少せしめると謂ふことに止まらず、やがて社會一般への大きな貢獻となるであらう。(終り)

### 本誌十月號重要記事

- 一、セイロン島の歴史産業交通の概況
- 一、歴代内務省國土局長と其時代
- 一、比島の道路と自動車
- 一、決戦下の土木戦士
- 一、時局日誌(七十一)
- 一、内務省、東京都、警視廳、北海道、樺太、及各府縣廳首腦部表